

東海の古代

第271号 2023年3月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

木簡からみた九州王朝の存在

—宮市 畑田 寿一—

現代の国家の定義は、「モンテビデオ条約（1933年）」でされており、「永続的住民の存在」、「明確な領域」、「統治する機構」、「他国との関係を取り結ぶ能力」、「他国の承認」を兼ね備えることが必須条件とされている。一方、古代国家では、「強制的な権力を持つ」、「階級、階層の分化がある」、「血縁枠を超えて地縁により結びついている」ことが挙げられている。

九州北中部地方が国家であるためには、統治能力を持ち、ヤマトがその存在を認め、ヤマトが行うべき事柄の一部を独自で行う能力を持つ必要があるが、果たしてそのようなことが言えるか木簡を通して検証してみたい。

1 九州王朝に対する一般の認識

現在の学説では、「九州王朝説は一部の好事家が唱える説であり、実証に耐えるものではない。」とされている。「日本列島は卑弥呼以来ヤマト中心で統治されており、『国一評一五十戸』の制度の原型は古来から存在し、国造は中央から派遣された者か、地方の豪族でヤマトに帰順した者が任命され、5世紀後半の雄略天皇以降、独立した勢力は存在しない。7世紀の九州には『遠つ朝廷』と呼ばれた大宰府が置かれて中央行政を補佐した。」と考えられている。

2 中国の史書からみた九州王朝の存在

一方、中国の史書に拠れば、7世紀前半の隋の時代には倭国には対馬国、筑紫国や秦国等があった。旧唐書には「日本国」が「倭国」を併合したと記されている。現在の歴史学では何かの間違いとされているが、再検討の余地は無いのであろうか。

中国の勢力ハイアキーは「皇帝」—「諸王」—「諸侯」で構成されている。「諸侯」は地方の有力者で土地を支配していた。「諸王」は「諸侯」を統括し、軍事同盟で一体化していた。その上の「皇帝」は誰かが中国全土を支配した場合に呼ばれた。中国からみると対馬国や秦国は諸侯の内では比較的独立性の高い諸侯の支配地域であり、筑紫国はその上の「諸王」の支配地域であったと考えるのが妥当であろう。当時の文献は裴世清など実際に倭国に来た者の見聞に基づいており、信憑性は高い。

九州地方は朝鮮半島南部の伽耶地域と同様に抜きんてた大王は存在せず群雄割拠していた。王冠が出土する墓は渡



来系の「諸侯」の墓であり、ヤマトと異なる勢力分布を示す好例であろう。更に、朝鮮半島は抗争に明け暮れていたが、日本は大規模な戦争もなく、平和が維持されていた。これをヤマト支配の結果とみることは難しく、九州地方での在地豪族の結束による結果とみるべきであろう。

3 遺跡や出土品からみた7世紀後半の九州地区の状況

7世紀後半に入るとヤマトや九州での木簡の出土数が増加する。木簡は大化の改新以降の『日本書紀』の記述の見直しに貢献してきたが、九州王朝の存在にも有力な証拠を提示している。

(1) 物資の移動からみる九州王朝の勢力範囲

石神遺跡や飛鳥池工房遺跡からは7世紀後半の地方から派遣されている工人への養米の輸送・支給のための木簡や地方の特産物の送り札が出土し、経済交流の範囲が窺われる。これに拠ると、

- ① ヤマトへの輸送範囲は飛鳥池の木簡「依地評都麻五十戸」などから隠岐まで含まれるが、筆者が調査した結果では九州からの木簡は存在しない。
- ② 大宰府への輸送範囲は九州北中部に限られ、中国地方や九州南部は含まれない。九州全土が含まれるのは7世紀末からである。
- ③ 大宰府からヤマトへの輸送は通常の租税では事例が無い。大宰府からものが送られるようになるのは平城京以降である。

以上の状況から経済的に九州北中部は独立しており、ヤマトの直接的な支配下に無かった。しかし、白村江の戦い以降には交易が九州全土に広まることが窺われる。

(2) 出土品からみる大宰府政庁

「大宰府遺跡木簡出土概報」（九州歴史資料館、1976年）に拠ると、大宰府の成立年代は次の様であった。

蔵前西地区	「久須評大伴マ 太丹□□」の木簡から大宝律令以前を想定。
大楠地区	時代を特定できる木簡は出土せず。堆積物から奈良時代後半を推定。
政庁地区A地点	「府国司」の木簡から平安時代を推定。
政庁地区B地点	「竺志前贄驛」の木簡から8世紀初頭を推定。
政庁地区C地点	「上毛郡」（豊国）と墨書きした土器が出土から8世紀を推定。
政庁地区D地点	政庁の職制に関する木簡が多数出土から7世紀末を推定。

また、観世音寺付近の不丁地区からも「合志（評）□□」などの木簡が出土し、国分松本遺跡からは685年制定の冠位の中の「進大弐」が記述された戸籍木簡が出土している。

以上の状況から大宰府政庁は7世紀後半以降活動が活発になり、7世紀末頃にはヤマトと同じ制度が九州にも及んでいることが窺われる。これらを九州支配の証しとする説もあるが、尾張以東に九州勢力の影が全く無いことからこの説は採用できない。

また、大宰府を前期と後期に分けて考え、出土する建築材の年代から7世紀前半に遡るとする説が有力であるが、政庁としての役割については未解決な点が多い。6世紀の磐井の乱に於いて最初の戦場が小郡付近であったことから小郡付近に政庁が置かれ、海岸付近にはヤマトの拠点があったと考えられる。大宰府付近は軍事拠点では無かるうか。通説では条坊の造られたのを7世紀末としているが、無理のない時代想定と思われる。

(3) 戸籍の残滓からみる白村江以降の諸制度

更に、正倉院の裏紙に残る大宝年代の戸籍や大宰府付近の木簡から白村江の戦い以降の

戸籍の制度はヤマトの制度と同じであることが示されている。

この解釈にも諸説があるが、700年頃には律令制度が全国に普遍したと考えるべきであろう。

(4) 九州地区における大王（天皇）の存在

中国の史書では九州地区での大王の存在を連想させる記事が見受けられる。しかし、以下の史実からみて大王は存在しなかった。

- ① 王墓を連想させる大規模な古墳が存在しない。
- ② 大宰府政庁に内裏が無い。
- ③ 各地の神社が地域に限定され、九州全土をカバーしていない。

4 まとめ

年号	九州での出来事	ヤマトでの出来事
天智 2	白村江の戦いで敗れる	(前年末) 齐明天皇葬儀
天智 3	唐軍使者来訪	甲子の改革令、百済王亡命
天智 4	唐軍254名来訪 (進駐?)	百済民4百余人を近江に移住
天智 5	耽羅・高句麗、使者を派遣、	百済民2千人を東国に移住
天智 6	唐軍使者来訪。耽羅に賠償	近江に遷都
天智 10	捕虜2千人帰国 (翌年唐軍撤退)	天智天皇崩御 (翌年壬申の乱)

以上、断片的な資料を眺めてきたが、この際、一切の前提条件を取り払って素直に歴史を考察すると、次の事柄が言えるのではないか。

- ① 中国的観点から眺めると地方には独立した勢力が存在した。ただし、独立性は弱く、いずれかの軍事連合に属するか共存していた。
- ② 九州は朝鮮半島南部と経済的な結びつきが強く一体化していた。一方、ヤマトは独自の道を歩み、博多付近を拠点として全方位外交を展開していた。
- ③ 白村江の戦いまで九州勢力は存在していた。ただし、その勢力範囲は九州北中部に限定されていた。白村江の戦いの主導者はヤマトとされているが、九州勢力の可能性が高い。
- ④ 敗戦後、唐軍は九州に進駐した。しかし、その中心勢力は唐に寝返った百済の残党であり、大宰府を駐留先の都督府とし、筑紫君薩野馬のような九州出身の将軍を中心に傀儡政権を樹立した。ヤマト側はこれ以上の進駐を防ぐために外交を展開したが、本体は近江に居り、博多湾付近に外交拠点を置いて大臣クラスを全権大使として交渉に当たらせた。
- ⑤ 新羅の善戦により唐軍は九州からの撤退を余儀なくされた。壬申の乱はその後の外交方針の意見の違いによるものと考えられるべきであろう。

九州国立博物館の白井克也氏は、自身のブログの「博多出土高句麗土器と7世紀の北九州」(考古学雑誌第83巻第4号、1998年)で、7世紀初頭は博多付近で新羅、百済、高句麗の土器が多数出土するが、中頃になると中心が大野城付近に移り、さらに後半になると官衙中心になり、統一新羅土器が中心になると述べられている。この動きが前述の考察を裏づけている。

7世紀初頭においてヤマトの勢力は抜きんでいたが、地方の勢力との連合の上に成り立っていたと考えるべきであろう。

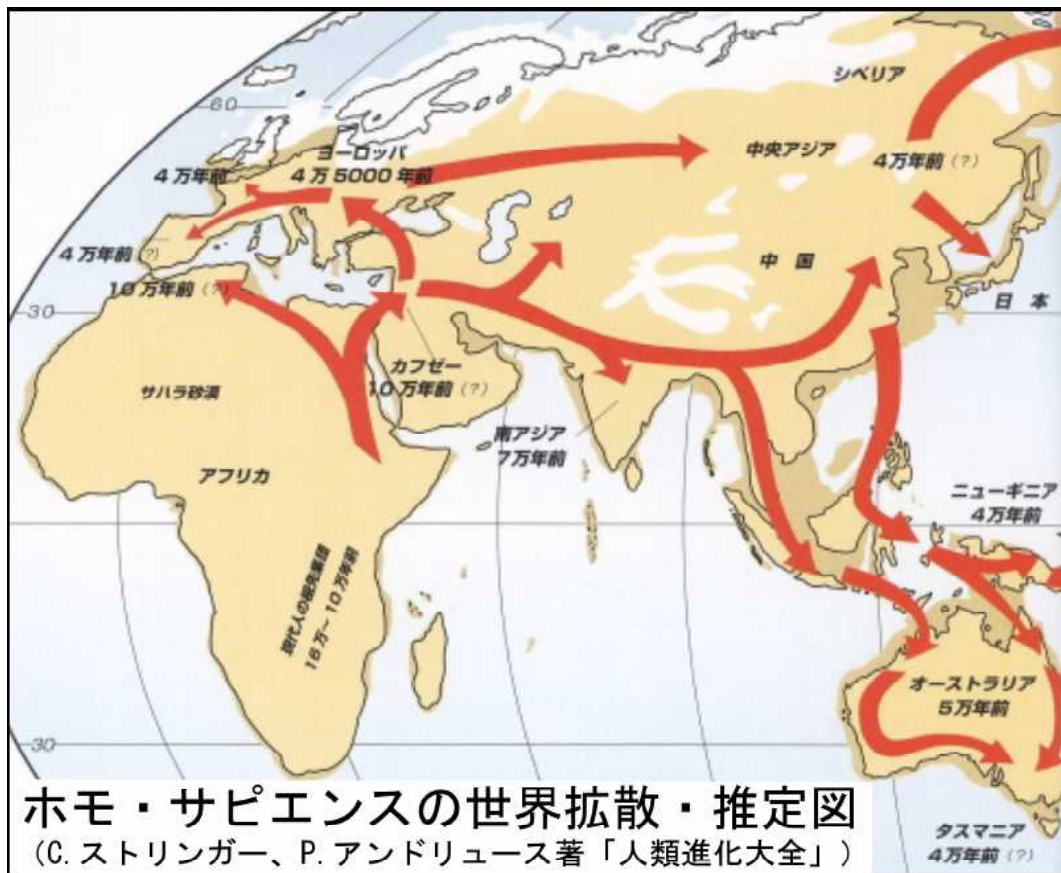
「新出アフリカ（人類の単一起源説）と
Y染色体ハプロタイプDの拡散並びに
漆文化との関係性」（比較言語学入門）

1 我々人類の祖先

現在主流となっている「アフリカ単一起源説」によれば、我々人類の祖先は、第1陣として今から約180万年前にアフリカを離れ、世界各地に拡散していった。しかし、そのほとんどが途中で絶滅し子孫を残さなかった。その後、第2陣として、現在の人類の直接の祖先であるクロマニオン人が約10万年前にアフリカから出たとされる。

（崎谷満著『DNAでたどる日本人10万年の旅』、斎藤成也他著『日本人の誕生』などを参照）

そして、そのアフリカから出たY染色体ハプロタイプの違いによって、A、B、C・・・と順番に名前が付けられている。日本人のタイプは、D2を中心にできている。現在の仮説では、DE遺伝子を持った人々は次の図のように移動して行ったと考えられている。



2 Y染色体ハプロタイプDEの拡散ルート

現在の仮説では、アフリカで変異したDE遺伝子を持った人類は、すでにアフリカで分化してアラビア半島を経由して、北部に向かう集団とインド、中近東を経由してアジア地域に拡散するグループに分かれる。アジアでは、インドシナ半島方面に分かれるグループと朝鮮半島を目指すグループに分かれる。そして、日本列島は東の果てとなる。

3 言語遺伝子について

人間の言語能力は、明らかに他の動物と比して卓越している。しかし、どの遺伝子がヒトに特異的な言語の進化を司っているのか、結論はまだ出ていない。遺伝学的に失語や構

音障害が発生する家系の解析から言語を司る遺伝子として注目を集めたのが転写因子として働くFOXP2 (forkhead box P2) である。この遺伝子は言語機能や口腔運動機能障害を示す常染色体優性遺伝の遺伝病家系から同定された。同遺伝子の変異アレルを継承した個人は、健常人と比べ低IQなど他にも様々な神経学的異常を示すのだが、言語機能の低下、言語を司る脳の領域の機能変化、口腔の機能異常などが目立つため「言語遺伝子」と呼ばれている。同遺伝子にはチンパンジーやネズミ等の動物とは異なり、ヒトにだけ特徴的な変化として、2箇所のアミノ酸置換があり、面白いことにこの2つの置換はネアンデルタール人ゲノムでも検出されている。こちらも現代人ゲノムの混入や、ネアンデルタール人と現生人類の過去の混血の結果だとか様々な議論がある。現在ではFOXP2の発現制御機構がヒトで特徴的な進化を遂げた可能性について検討されている。また、同遺伝子以外にもモノマネをする鳥などとの進化的比較からKIAA0319など複数の遺伝子の進化がヒトの言語機能に関連する可能性も示唆されている。(参考文献：WIREs Cogn Sci 2013, 4:547-560.)

どうやら、この考えでは、同じ言語を操る民族は、特徴的な言語遺伝子を持っているようである。その遺伝子はまだ十分に解明されていない部分があるが、この考えによって説明できることがたくさんある。人類は、特定の言語を操ることで、そのヒトの言語遺伝子にも影響し、遺伝子も進化を遂げるようだ。

4 日本語も韓国語も共通の祖語を持つ (仮説)

D遺伝子を持った人類が移動したルートに当たる国々を挙げると、日本語、韓国語、アイヌ語が挙げられる。その民族の数ある語彙の中で、少なくとも5世紀以上前に作られたと推察した大和言葉を選んで、Google翻訳で共通の語彙を捜してみた。ここで比較言語学の考えを利用して、日本語と韓国語が同祖語であることを示したいと思う。そのためには、基本的な韓国語の知識(発音体系、文法など)が必要になる。

次表に、①黄金(こがね)、②漆(うるし)、③傘(かさ)などの語句の例をあげる。

語彙(発音)	日本語	アイヌ語	韓国語	語彙発生予想場所
黄金(こがね)	kogane	konngane	고가네 gogane	東シナ海以東
漆(うるし)	urusi	usi	우루시 ulusi	東シナ海以東
傘(かさ)	kasa	kasa	우산 usan	途切れる
女の子(めのこ)	menoko	menoko	메노코 menoko	アラビア
タンコブ	tankobu	tapkop	탄콰 tankob	アフリカ
蜆(しじみ)	shijimi	(異なる)	시지미 sijimi	東シナ海以東
昆布(こんぶ)	konbu	kompu	다시마 dasima	日本列島内
雲丹(うに)	uni	nona	성게 seong-ge	日本列島内
坂・平・崖(ぴら)	pira	pira	피라 pila	アフリカ
南瓜(かぼちゃ)	kabocha	kanpocha	호박 hobag	日本列島内
瓢箪(ひょうたん)	hyotan	(異なる)	효탄 Hyotan	中国?
国(くに)	kuni	—	쿠니 kuni	—
曙(あけぼの)	akebono	—	아케보노 akebono	—

注1 「ウルシ」は、東シナ海周辺にD遺伝子を持った人が到着したときにできた語彙ではないかと思われ、東シナ海が語彙の発生場所とすると、今から3万年前の「韓国・日本語祖語」を土台にした言語ということになる。

注2 「ウルシ」について、中国以西や以南の国々では、ネパール「sumac」、ジャワ「sumac」、タイ「su meakh」、タミル語「cumak」の例のように共通の祖語を持っていることが予想され、ミャンマー「ywann」やベトナム「caythudu」は異なる祖語であると考えられる。

D遺伝子を持った人類の移動ルートは、いろいろな仮説が立てられている。

私としては右の図、仮説Bのような想定を考えている。

仮説A D遺伝子を持った人のルート



仮説B D遺伝子の移動ルート



知人のミャンマー人（シャン族、昔のシャム）であるW.0さんに話を聞くと、タンコブ、クニ、アケボノ、ピラは理解できる。シャン族の人は、発酵食品料理が有名とのことで、野菜を使った料理はおいしく、漬物も作られている。豆腐、納豆などの発酵食品の語彙は、ミャンマーでも、トウフ、ナットウと発音し、インドから東のアジア圏では通用する言葉である。さらに、こうした各国の文化と語彙との関係を探っていくと面白い結果が出そうである。（豆腐：두부 トウフ、納豆：낫토 ナット、あけぼの：아케보노）

もちろん豆腐も納豆も中国語からの借用語である。元々は、「とうふ」のことが「納豆」で「なっとう」が「豆腐」と書いたようであり、「なっとう」は豆を発酵させて作ることから「豆腐」の文字であれば筋が通り理解出来る。

アイヌの語彙の中にこうした発酵食品の語彙は、気候の関係であろうか、発酵食品を食べる文化はなく、発酵食品の語彙は無いようである。

5 DE遺伝子の流通ルートにある国々の共通語彙

人類がアフリカから出てから移動した地域にある言語の中で、驚くことに次の語彙は、ほとんどの国で共通する語彙で、かつ同じ意味を持つ。その語彙は、タンコブ、クニ、アケボノなのである。

① D遺伝子を持った人類の移動ルート上の国や言語

日本、アイヌ民族、韓国、チベット、タイ、ミャンマー、ベトナム、タミル語
カンボジア、ネパール、タイ

② E遺伝子を持った人類の移動ルート上の国や言語

ギリシャ、トルコ、ユダヤ、サウジアラビア、シリア、ラテン語

③ それ以外の遺伝子を持った国（E遺伝子を含んだ人が住んでいる国）

ナイジェリア、アルバニア、エジプト、イタリア、ジョージア、ブルガリアなど

①～③の語彙は、共通の言語である。つまり、これらの言語は、アフリカから人類が出る以前から「同じ語彙」を使っていたことになる。

6 「DE遺伝子文化圏と漆文化」のまとめ

上記5で示した多くの国では、いずれの国も「独特の漆文化」を持っているが、残念ながらすべての地域で「ウルシ」と呼ぶわけではない。

ただし、特にアジア圏では、チベット、ネパール、ブータンにおける漆文化が盛んであった想定すると、D遺伝子を持った民族の人々が、「タンコブ・ピラ・アケボノ」という語彙を保持しながら日本の方向へ移動し、その途中で新たに「漆文化」を獲得して「ウルシ」という言葉を獲得したと考えることができる。一方、ネパールから南下した漆文化は、「ウルシ」を異なった語彙で表しており、語彙が変化して現在に至っていると推察する。

現在、D遺伝子を持った人が減ってしまった通過地点においては、漆文化と特定の語彙が留まっており、古代に共通の語彙を持った地域を探し出すことで、D遺伝子を持った人類が移動したルートを見つけることが可能となる。

今まで取り上げたいくつかの語彙の研究から、東シナ海から韓半島の南半分の地域には、倭人と朝鮮人の共通の祖先が住んでいたとしか考えられず、やがて、そのことが科学的に証明される日も近いと信じている。なお、現在、日本語はウラルアルタイ語族に種分けされているが、総合的に語彙や文法を考えると、日本語は、シナ・チベット語族のうち、チベット・ビルマ族に入るのではないかと考える。

6 課題

現在の中国では、「ウルシ」とは言わないが、「ウルシ」の語彙は、日本列島の近くでできたと思われ、揚子江の河口あたりに、「ウルシ」という言葉が存在するのか、文化が残っているのかを探ることが今後の課題である。また、倭人と朝鮮人の共通の言語を探るには火山島で遺跡が残りにくいものの済州島（耽羅王国）の古代文化の研究も欠かせない。

私が論考に利用した語彙は、現在まで残った各国で共通する語彙だけである。およそ数万年前から現在に至るまで、その語彙が残っていることは奇跡的なことであり、その古い語彙上にさらに多くの新しい語彙が上書きされたであろうが、その部分についてはまだ取り扱っておらず、弥生時代に東アジアで上書きされた語彙にはどんなものがあるのか、上書きしたのはどこの地域なのかなど、研究の課題は多い。

現代の東アジアの各国で使われている共通の語彙は、グーグル翻訳機で見つけたもので、これだけはっきりと共通語彙が現れるところを見ると、ここに示した共通語彙は、数万年の期間に渡って私たちの遺伝子上に組み込まれているもので、後に獲得した語彙以上に強烈に焼つけられている語彙と考えられ、これからは後世に獲得した語彙がどうしたルートで得られて、日本言語の完成につながっていったのかを研究したい。

太上天皇大行天皇について

名古屋市 石田 泉城

「太上天皇・大行天皇」については、『万葉集』の歌の題詞に出てきます。

該当の『万葉集』の歌は、第九巻の1667～1679番にあり、最初の1667番は次のとおりです。

題詞 大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首

大寶元年辛丑の冬十月に太上天皇大行天皇の紀伊国に幸(いでま)しし時の歌十三首

歌 為妹 我玉求 於伎邊有 白玉依来 於伎都白浪

訓読 妹がため 我れ玉求む 沖辺(おきへ)なる 白玉寄せ来(こ) 沖つ白波

意味 彼女へのみやげにしようと私は玉を求めている。

どうか沖の白波よ。その玉をこの海岸まで打ち寄せてくれ。

1667番から1679番までの13首のうちの説明書き(題詞、標訓)に、大宝元年(701年)の10月に「太上天皇大行天皇」が紀伊に幸行したときの歌であるとあります。

太上天皇たいじょうてんのうは、皇位を後継者に譲位した天皇のこと、または、その天皇の譲位後の尊号とされます。大行天皇たいこうてんのうは、天皇が崩御した後、まだ諡号が贈られていない間の便宜的な尊称とされます。諡号とは、死後に奉る「贈り名」で、大行は「大いなる行い」ですから、崩御した天皇を顕彰する語句です。先帝の意味もあるとされます。

この「太上天皇大行天皇」について、2説あります。

一説は「太上天皇大行天皇」を二人の天皇とする説です。これが主流の説で太上天皇を41代持統天皇とし、大行天皇を持統の孫の42代文武天皇とします。太上天皇を持統天皇とするのは妥当として、文武天皇を大行天皇と呼ぶのはおかしいです。大宝元年（701年）には、文武天皇（707年崩御）はまだ健在で崩御していませんし先帝でもありません。

もう一説は「太上天皇大行天皇」を一人の天皇とする説で持統天皇とします。持統天皇は太上天皇で妥当ではあるものの、大宝元年（701年）に持統天皇（703年崩御）はまだ健在で崩御していませんので、大行天皇を存命の先帝の意味と捉えれば、当説は妥当と思われれます。そこで、一般的には、この大行天皇は、先帝の意味で用いられ持統天皇とします。なお、当会の大島秀雄さんも、この説に同調されています。

実は持統天皇の歌は『万葉集』に6首あり、たとえば著名な歌の28番は次のとおりです。

題詞 藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姫天皇 元年丁亥十一年讓位輕太子 尊号曰太上天皇
天皇御製歌 (紀州本)

歌 春過而 夏来良之 白妙能 衣乾有 天之香来山

訓読 春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山

意味 春過ぎて夏がやってきたようだ。真っ白な衣が干してある。天の香具山に。

28番の題詞にあるとおり、持統天皇（高天原廣野姫天皇）は、輕太子に讓位した太上天皇とあります。ですから1667番の歌の太上天皇も持統天皇と考えられます。ただ、1667番の歌の内容は、「妹」のために玉石を探している男性の歌ですから、この歌を詠ったのがお供の人ではなく「太上天皇大行天皇」とすれば、女帝の持統天皇ではありえません。

また、もし1667番で持統天皇ただ一人をあらわすのであれば、28番の歌にあるとおり、太上天皇のみで事足りるため、1667番の題詞に太上天皇とともに大行天皇を追加するのは奇妙です。ここに大行天皇を加えたのは何故でしょう。主流の通説では『万葉集』の大行天皇をすべて文武天皇と理解されていますが、どの歌の場合も疑問符が付きます。

すでに亡くなっているが諡号がない天皇とは、いったい誰なのか疑念が生じます。

ここで気になるのが高市天皇説です。『日本書紀』では高市天皇の存在を認めていませんが、もし、高市天皇が歴史事実であるとすれば、一見持統天皇や文武天皇のことと思わせながら、実は高市天皇の存在に注目させるように、わざわざ1667番に1665番と重複する歌をのせ、「太上天皇大行天皇」と記したのではないかと思われれます。高市崩御後の諡号は当然ありませんから、諡号のない先帝として高市天皇の存在を暗示しているのかもしれませんが。いずれにしても大行天皇の捉え方は複数あって錯綜しています。

なお、当会の磯田和則さんも高市天皇説に同調されています。

前回の例会の話題

- ・日本の漆文化 名古屋市 石田泉城
- ・脱活乾漆像と塑像の考察から見た東アジアⅡ 刈谷市 酒井 誠
- ・短甲からみる倭の五王の時代の軍事力 一宮市 畑田寿一
- ・集歌1667の太上天皇大行天皇とは 東海市 大島秀雄

例会の予定

- 1 日時 3月18日(土) 13時半～
- 2 場所 名古屋市市政資料館

来月以降の例会

全て土曜日 4/15、5/20、6/17、7/15

会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当：石田) toukaikodai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 3月28日(火)

年会費の納入のお願い

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 2023年5月20日(例会予定日)
- 3 振込先

・金融機関：ゆうちょ銀行

・名称：東海古代研究会

・店名：二一八 ・店番：218

・口座：普通 1299395

ゆうちょダイレクトなら月5回まで手数料無料。

募集中!